


屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



2023年ヤクザル調査を行いました！ 02

調査員からのクーコール (7) 佐藤真一郎さん 04

調査メシ (7) ピリ辛チーカマ 06

やくざる七つ道具 (7) なた 08

屋久島の森の住人たち (7) 10

解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし (7) 12

やくざるなよんこま (7) 15

24時間戦えますか (3) 屋ごはんまで 16

犬山より 18

2023年ヤクザル調査を行いました!

新型コロナに関わる制限が撤廃されたのを受け、過去3年間行ってきた調査隊での対策を見直し、一度に集まる人数を10人から14人にまで拡大しました。計算上は、一つの定点を調査する日数は7.1回になり、コロナ前と同じだけ定点調査できることになりました。ですが、それはあくまで、計画上の話。計画通りにいかないこと自体は、織り込み済みではありますが、今年の計画通りにいかないっぴりは、予想の斜め上を行くものでした。

調査員集合の5日前の7月31日から、台風6号の影響でフェリー屋久島2が欠航していました。その後、台風が屋久島から一時的に遠くなった2日間だけ、フェリーが運航したのを除き、8月10日まで、延々とフェリーは運休したのです。調査員にはほかの手段で入島してもらったものの、集合してすぐ、好和荘で缶詰生活を送ることになりました。調査員に本土で買って持ち込んでもらったりして食料は確保しましたが、長期の欠航のために、ガソリンの給油制限まで行われたのは、予想外でした。6日間に及んだ待機生活の間、大学院生の調査員による研究発表をしたり、映画を見たりして過ごしました。

台風が屋久島のほぼ真上を通過した後の8月9日。吹き返しの豪雨で、映画を見ようにも、雨音で音声が聞こえなくなる始末。永田では川の氾濫で床下浸水が起り、ニュースで知って心配してメッセージをくれるOBOGもいました。結果、当然のことではありますが、大川林道が不通になりました。森林管理署からその第一報を電話で受けたとき、わたしたちは長い長いインド映画の、休憩の時間でした。「ま、とにかく映画の続きを見ようか」と、そのあともしばし、恋敵に殺された男が、ハエに生まれ変わって復讐するという奇想天外な世界に浸りました。映画の後、善後策を考えるミーティングで、とある調査員が「今なら何でもできる気がします」と言ったのが、忘れられません。

現実世界では、調査員がハエになって大川林道に飛んで行く、などということはできるはずもなく、われわれの苦肉の策は、調査地を変更して、



サルに囲まれる定点調査員。西部林道ならではの光景です。

西部林道で調査する、ということでした。1994年に行われた調査の再調査をして、集団密度の変化を明らかにする、という目的です。犬山のわたしの研究室を開けてもらって、昔の調査報告書を掘り出して定点の場所を復元し、下見に1日費やし、8月12日、ようやく調査を開始することができました。西部林道も、台風のために調査地の端よりも4km南で車両通行止めになっており、長い人は毎日往復で4時間、16kmの道のりを、てくてく歩きました。この場所は日本で一番サルが多い場所です。定点に着いたらそこに群れがいて、30頭以上が4時間も定点に居座るといふ、ふだんの大川林道の調査ではありえないことも起こりました。

4日間の西部林道での調査を終え、大川林道も無事復旧し、8月18日に入山して、大川林道終点にテント場を設営して、本来のわれわれの調査を開始しました。終点の3km手前付近、われわれがかつて「辻南テント場」と呼んでいた場所に、伐採作業の会社の小屋ができていました。小屋と言っても、中は畳部屋と二段ベッド、発電機があって洗濯機も五右衛門風呂もある、ただテントを張ってブルーシートで屋根を作っただけのわれわれのテント場と比べたら、夢のような環境です。この会社の皆さんは、われわれのことを、同じ山の上に泊まる仲間と思ってくださったのか、お風呂を使わせてもらったり、スイカをくださったり、バーベキューに呼んでくださったり、はては小屋に泊めてもらったりして、ほんとうに親切にしてくださいました。あとで聞いたら、大川林道の不通箇所を、会社の自腹で速やかに直してくれたとのこと。何から何までありがたいことでした。

その後は天気にとっても恵まれ、9月9日の最終日まで、雨で調査を断念したのは1日だけでした。定点調査は順調にこなし、予定の6割ほどの調査日数で、すべての定点を3日ないし4日調査を行うことができました。識別している5つの群れの調査には苦勞しましたが、最終盤の4日間で、ばたばたとなんとかカウントができました。わたし個人としては、林道にほとんど姿を現さず、ほとんど幻の存在だったPE群を、一緒に調査した統括者が見つけてくれて、森の中で行進するところをカウントできた瞬間が、一番記憶に焼き付いています。

(半谷吾郎、1993-2023年参加)



テント場にて、まもなく夕食です。黙食することもなく人数も増え、コロナ前のヤクザル調査隊が戻ってきました。

コロナ前は、1日目講習、2日目西部林道での実習、3日目に入山してテント場設営、4日目から7日間調査、11日目に下山して打ち上げ、12日目に解散、を2セットでした。コロナ後は決まった集合解散日なくなり、日程がかなり柔軟に組み替えられるようになりました。

調査員からの クークール 7

クークールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クークールを鳴いてもらいました。

佐藤真一郎

2001-2004 年参加

「屋久島にサルの調査に行くヤツはいないか？」

大学1年の6月、根っからの文系学生を謳歌していた私に、耳を疑うお誘いがありました。屋久島の山へ籠もりながら、野生のサルの生態調査を行うという、これまでの人生では関わりのまったくなかった世界への扉です。ここから、わたしのヤクザル人生が始まります。

つい先日、小5の長女と高尾山に登りました。三鷹の我が家から、高尾山はわりと近いため、何度も登頂しているなじみの山です。登山客であふれかえる京王高尾山口の駅を降り立ったとき、ふと急に昔の記憶が蘇りました。

22年前、平年に比べると梅雨明けの早かった2001年7月20日、東京での事前実習は高尾山のさる園で実施されました。遅刻をしたメンバーに静かにブチ切れている半谷さんに恐れおののきながら、いざ高尾山へ。道中、釣谷さん(1999、2001、2002年)が捕えた蛇にビビりながら、さる園での実習。野生生物の専門家という、いままで出会ったことがない人々に「こんな世界があったのか」と新たな価値観が広がり始めたのを、今でもよく覚えています。

佐藤さんの文章を読んで思い出しましたが、2000年の総括会議で、もっと事前の教育をちゃんとやった方がいいという意見が出て、この年から、京都と東京で、サルを観察する実習をすることにしたのでした。たしかに、最初の年は座学もあったかもしれませんが。



午後は神奈川の六会日大前駅にある日大生物資源学部のキャンパスでの座学でした。高尾駅から八王子駅で乗り換え、横浜線で町田駅へ。町田での小田急線の乗り換えタイミングで立ち寄った吉野家で飲んだビールの旨かったこと。今更ながらお詫びいたします。すいません！午後の実習はほろ酔いで参加しておりました。

今思うと、初めての屋久島は、刺激に満ちた日々でした。調査前からのテント暮らし、定点で過ごしたあまりある時間、食当の日の陽光、道の様な川と、川のような道、ヒルに食われて血に染まった靴下、虫にさされて倍に腫れた足、やたら多い替え歌、先輩も後輩もむやみに濃すぎる調査員一。今となってはどれも懐かしい思い出です。

大学を卒業し、社会人となって20年弱たった今も調査隊メンバーとは不思議な縁が続いています。前述の長女が保育園の頃に行った市民プールでのこと。幼児さん用のプールで子どもを連れた黒江さん(2002年)に偶然会ったり、昨年、会社の同じ部署に異動してきたメンバーがうさぎちゃんこと大谷くん(2004-2010、2012-2014年)と同じ研究室だったり、人生のポイントポイントでヤクザル調査隊の持つ影響力を感じずにはいられません。

わたしは今、歴史雑誌を出している出版社に勤め広告営業の仕事に従事しています。雑誌刊行物の傍ら、地方の埋もれた歴史資源に光をあて、その魅力を引き出し、地域のファンづくりを行うのがメインの仕事です。生態調査とは違うものの、仕事で史跡や遺跡のフィールドワークに行く時には、いつも調査のことを思い出します。今後も、ヤクザル調査隊での経験が様々な人々に影響を与え、その人生を良い方向に導いてくれるチームであり続けることを願ってやみません。



2002年参加当時の筆者。食当隊長を務めました。右に写っているのは、本文にも登場する釣谷さん。

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘をレシピとともに語ります。

福田 滯李 2019-2023 年参加



ピリ辛チーカマ

2020年、どこからともなくやってきた某ウィルスによって、ヤクザル調査隊の調査メシからは温もりが消えました。料理が苦手な調査員の1人である私は、このことを心の隅で大いに喜んだのですが、それはここだけの秘密にしてください。芯米への恐れは相変わらず健在でしたが、それでも「食当」という魔の役割が回ってくる心配がないのです。なんて幸せな調査になったんだ！と、コロナ後初となる2021年、調査が始まる前に、関東の自宅で思っていました。

しかし実際にヤクザル調査に参加してみると、おかしなことに気がつきました。レストランのように美味しいご飯ではなかったし、何十人分のご飯なんて作り慣れていないし、調査で疲れた調査員の心を癒すご飯に仕上げなくてはいけないプレッシャーだってあったのに、調査員が苦勞して作ってくれた調査メシ以上に美味しいご飯はなかったのです。そのことにテン場で気がついた私は、こっそり缶詰をやめ、味噌汁をやめ、魚肉ソーセージとチーカマには見向きもせず、米とふりかけだけを食べるようになりました。レトルトは食べました。辛くないものに限りましたが。OGOB

や友の会の会員の方々が、調査の成功を願って購入してくれた食料を食べない不良人間で大変申し訳ないのですが、本当に“人が作ったご飯”というものがいかに美味しいかを思い知ったのです…。

そのように1人で静かに何かへ対抗していた、今年の調査のある日、半谷さんのポケットから衝撃のおかずが現れます。「人気ないのかな…僕が買ったんだけど」という半谷さんの少し寂しそうな言葉と共に、現れたのは“ピリ辛チーカマ”。半谷さん曰く、普通のチーカマより少し安いらしい、その赤みがかかったチーカマは最初「また辛い系かよ…」と私をがっかりさせました。レトルトにおける“辛くない”という言葉に騙されて痛い目をみた私は、ピリ辛チーカマも辛くない詐欺の一部だと思ったのです。ですが、何を思ったか数日後、私はお昼ご飯のお供にそのピリ辛チーカマを選んでみたのです。「美味しい」という風の噂を聞いた影響もありました。しかし、本当に辛くない詐欺だった場合、食べ切る自信はありません。ならば、と、思って、辛くて食べられなかったら代わりに食べてもらうように先輩調査員角田さんをお願いし、保険をかけてからピリ辛チーカマの、あの赤いテープを引きました。そして、恐る恐るその、ほんのり赤いチーカマを口に運びました。一口食べたその瞬間、全世界が輝き出しました。そう、ピリ辛チーカマは衝撃的な美味しさだったのです！！！！なんだこれは！と思ったのと同時に、なぜこんな美味しいものを私は食べなかったのだろうと後悔しました。普通のチーカマがあまり得意ではなかったため、“ピリ辛”になったものなど論外だと、食べてもないのに思ってしまっただけです。苦手かもしれないけど、挑戦してみるということがいかに重要であるかを、ピリ辛チーカマから学びました。

ピリ辛チーカマ、本当に美味しいです。大きさ的にも食べやすいですし、調査でほっと一息つきたいとき食べるのがおすすめです。1つ気になることとしては、所詮はチーカマなのでレシピがないという事です。

現在、調査員に昼ご飯のおかずとして用意しているのは、缶詰、魚肉ソーセージ、ちーずかまぼこです。調査の最終盤になると、缶詰がなくなってしまって、レトルトを持って行っていいことになったり、卵焼きや大学芋を作ったり、パックの佃煮を買ったりします。

やくざる七道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

なた

現在のヤクザル調査隊の調査の目的は、長い時間をかけて移り変わる森林とニホンザルの関係を明らかにすることです。数十年にわたって、同じ場所で同じようにデータを取り続ける長期調査を続けるには、さまざまな継続的な努力が必要です。その努力とは、大きくは、次世代の調査員を育てることとか、運営のノウハウを引き継ぐとか、各種調査道具を維持管理したりとかいったことですが、もっと小さなところでも、地味に努力が必要です。今回紹介する道具、「なた」はそのための必需品です。

ヤクザル調査隊の定点は、現在の場所で調査を始めた2000年以来、基本的に変わっていません。本連載第1回「タニボン123」で紹介したとおり、そこへ向かう道のりには、すべて目印がついていて、今年の調査でも、23年前の調査員が歩いたのと同じ道を、そのころには生まれていなかった調査員が歩きました。ところが、歩く「道」は同じでも、そのまわりの森はどんどん移り変わっていきます。かつては伐採後にも生えていなかった場所は、今はたいてい、やぶになって、低木やつるに埋め尽くされています。やぶをかき分けて通り抜けることもできないわけではありません。しかし、ハウロクイチゴやサンショウのとげ、若いスギの鋭い葉が体のそこかしこに刺さるのに嫌気がさし、やぶが生長しすぎて、道だったところが道に見えなくなってしまう、定点調査員がまったく的外れな方向に進もうとするのを見て、さすがにこれは、道を切るしかない、と決心することになります。

なたを使うにはいくつかコツがあります。ひとつは、木を真横に切るには、繊維を完全に断ち切らなければならず、より力が必要なので、繊維の向きと近くなるよう

に、枝の伸長方向に沿って、斜めに切ること。もうひとつは、切る対象がぐらぐらしていると、なたが当たった場所に力がかからないので、根本付近やスギの横枝のように、安定した場所を切るときを除いて、なたを持つのと反対の手で、きちんと木をつかんで切ることです。道切りは、破壊衝動が満たされ、劇的ビフォーアフターを楽しめる、一面では愉快的な作業ではありますが、なかなかの重労働です。その間はサルが出てまず気づかないので、データは取れません。こうして切り開いた道も、早ければ翌年には、遅くとも数年もすると、まったく跡形もなくふさがってしまいます。とは言え、何もしなければ、ほんとうに通れなくなってしまうでしょう。というわけで、統括者は、調査中に何時間かは、なたによる道切りに時間と労力を費やさなければいけません。

なたは危険な道具でもあります。わたしも、今年の調査で、道切りの最中になたで左手親指の爪を割ってしまいました。思い返すと、この日、わたしは、4つの定点に人を案内し、そのあいだに定点までのルートをやぶを切り、できれば一番遠い定点で植物調査をし、そのあと群れの追跡をして、、、と、さまざまなことをやろうと考えていたのでした。道切りも最低限にし、「左手できちんと木をつかんで切る」という基本はどこへやら、とりあえずじゃまな植物をなたで払っている、という状態でした。そういう心の余裕がないところに、事故の誘因があったのだと思います。

すぐに、わたしが案内していた定点調査員に、今年から標準装備することにした救急セットで応急処置をしてもらいましたが、わたしより彼女の方が大慌てでした。そのときわたしは、「2002年には、**くんがなたで左手の動脈を切って、森の中に



わたしがなたで爪を割ってしまった事故の20分後。このあと、下山して病院に行きました。

鮮血が飛び散ったことがあるから、それに比べたらだいじょうぶかな。彼は刃物が大好きですごく研いで鋭くしてたけど、このなたはなまくらだから爪しか割れなかったんだな」などと考えていたのでした。この原稿を書いている時点で、事故から37日目。割れて本体から離れてしまった左手親指の爪の先の部分は、まだ5mm四方くらいが、下の皮膚とつながっています。

この文章を読んだ若い人たちが、「うわ〜痛そう」と思い、将来なたをふるうときに、同じ過ちを繰り返さないように、我が恥をさらすことにしました。転んでもただでは起きず、失敗も次の教訓として生かす。これも、ヤクザル調査隊がずっとやってきたことです。

(半谷吾郎、1993-2023年参加)

2002年の鮮血が森に飛び散っている様子は、実は写真に残っています。さすがにここに載せるのは刺激が強すぎるので自粛しましたが、怖いものを見たいという人は半谷までご一報を。

屋久島の森の住人^{たも}は？

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ニホンヤマビル

Haemadipsa japonica

環形動物門顎ヒル目ヒルド科。

日本に約60種以上生息していると言われていたヒルの中でも認知度・遭遇率ともに高い吸血性のヒル。まんまるなギャップが魅力的。

私が紹介する屋久島の森の住人。それは調査員のみなさんが、調査中に1度は吸われ、気づかぬ間に血を流したことがあるであろうニホンヤマビル (*Haemadipsa japonica*)、通称ヤマビルです。茶色の体で背中には3本線が入り、前と後ろの吸盤で張り付きながら尺取り虫のように進む動きが特徴的です。秋田県を北限とし、我々の調査地である屋久島、そして沖縄まで幅広く生息する日本固有のヒルです。そしてご存知の通り、ヒト、シカ、イノシシやカエル等の動物を吸血対象とし、二酸化炭素や熱を頼りに、頭フリフリヒルダンスをしながら忍び寄ってくるのです。

私がこのヤマビルと初めて出会ったのはまさにこのヤクザル調査隊。しかも調査隊初参加の年の調査初日に、定点へと向かう道でのことでした。ヤマビルの存在も姿も知っていたのですが、実はこの日まで実物を見たことは無く、「ヤマビルを採集せよ」との調査隊サブミッションにどきどきしつつ定点へ歩いていたらその時。

…腕にひんやりぷにぷに感触…

はっ！これはまさか…？と腕を見ると黒っぽい丸まるとしたものが。最初は驚いて思わず手を振り払いそうになりましたが、よく見るとなんと愛らしいフォルム。血を吸ってはち切れんばかりに膨れたお腹、吸い終わった後のやる気なく掌の上でころがる愛嬌のある仕草…あの日、あの時、あ

の定点で。私はヤマビルに恋に落ちたのでした。ラブストーリーは突然に？

さて、このヤマビルという生き物。不思議なことに、吸血する時はほとんど痛みが無いので、どれだけ注意を払ってこまめにヒルチェックをしたとしても、いつの間にか足首を吸われていたり、あるいは脱いだTシャツや靴下が血まみれになっていてやっと気づいたりということがありますよね。ヤクザル調査隊でも20箇所ほどサイレント吸血され、胸を紅く染めて帰ってくる調査員を見たことがあります。まさに屋久島ホラーです。

ヤマビルはベンツのマークのような3つの顎と細かい歯を持っており、これを使って皮膚の表面を切り裂いてしみ出てきた血を吸うという吸血方法をとっています。これだけを聞くと「うわ…痛い…！」となりそうですが、実はヤマビル、優しいことに、動物に気づかれず安全に血を吸うために、麻酔液を出してくれるのです。その名も「ヒルジン」。なんと近年は炎症の治療など、医療でも活躍しているのだとか。そんな「ヒルジン」を分泌されることで、私達は痛みを感じずにヒルに吸われることができるのです。ヒルジンは血液凝固を阻害するので、血が止まらなくなったり、アレルギー反応でたまに痒くなるという代償はあります。ちなみに、私の経験上、乾燥したヤマビルはヒルジンを出す余裕が無いらしく、吸血されるととても痛い時があります。吸われる際は潤ったヒルに吸われることを強くおすすめします。

血を吸うということで恐れられがちですが、ヤクザル調査隊、そして

屋久島とは切っても切り離せない魅力的な生き物。ぜひみなさまも屋久島に来た際は、地面に息を吹きかけ、足元のヒルを愛でてみてください。

(平川瑠菜、2021-2023年参加)



地面に息を吹きかけて、ヤマビルを探す筆者。



定点でいつの間にかくっついてきた吸血済みのヒル。まんまると転がって満足そうだ。

平川さんが初参加した2021年の調査では、三重県の子どもヤマビル研究会に送って研究に使ってもらった目的で、生きたヒルを採取していました。今年の調査では、平川さんの大学の卒業研究に使う目的で、ヒルを採取しました。

解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 7

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

ヤマビルは誰の血液を吸っているのか!?

半谷吾郎 1993-2022 年参加

Hanya G, Morishima K, Koide T, Otani Y, Hongo S, Honda T, Okamura H, Higo Y, Hattori M, Kondo Y, Kurihara Y, Jin S, Otake A, Shiroisih I, Takakuwa T, Yamamoto H, Suzuki H, Kajimura H, Hayakawa T, Suzuki-Hashido N, Nakano T (2019) Host selection of hematophagous leeches (*Haemadipsa japonica*): implications for iDNA studies. *Ecological Research* 34: 842-855.

ヤクザル調査隊がヤマビルの調査を始めたのは2010年のことです。とある参加者から、自分で論文を書いてみるという授業の一環で、ヤマビルを調べてみたいという申し出があり、ヒルの分布と、われわれの調査対象であるサルやシカの分布に関連があるのか、ということ調べてみました。紆余曲折の末、この研究は、林道にはヒルが少ないという、面白くもなんともない結論だけを得て、さすがにこれでは出版できないと、お蔵入りになったのです。



解剖されたヒルと、取り出された消化管。
黒い部分は血液の残滓。

一方、「ヒルの分布をサルやシカと関連付けるなら、ヒルの宿主がサルやシカだという証拠があるな」と思い、ヒルを集めて、DNA解析で宿主を調べる研究に、2012年から着手しました。当時京都大学の大学院生で、日本でも数少ないヒル研究者の中野隆文さんに、採取したヒルを送って、消化管を解剖で取り出してもらいました。

それをすりつぶしてDNAを抽出し、哺乳類の種を判別できる領域の塩基配列を解読して、宿主はほぼすべて、シカであることを確かめました。ヒルの解剖に、中野さんは1匹2時間もかけていたそうで、さすがに毎年数10匹の解剖をお願いするには忍びなく、それ以降は解剖せず、そのまますりつぶして実験に使っていました。

そんなとき、わたしの職場にカナダから友人の研究者がやってきて、興味深い研究を発表してくれました。アフリカのとある森林で、ハエをたくさん集め、それをDNA解析して、どんな動物がそこに生息しているのかを調べてみた、というものです。それを聞いて、あれ、これ、ヒルも同じ目的で使えるんじゃない!?と気づきました。文献を調べてみると、ハエと並んで、ヒルが、その地域の脊椎動物の多様性を簡単にモニタリングできる生物として着目されていることが分かりました。こうして、ヒルを哺乳類研究のツールのひとつとして研究する、という方向性が生まれました。

2012年から2015年に集めたヒルのDNA解析によって、宿主がほとんどシカであることを突き止め、その結果を、われわれヤクザル調査隊で設置したカメラトラップの結果と比較して、ヤマビルは宿主としてシカを特に選択している、とする論文をまとめて投稿しました。しばらくして査読結果が戻ってきましたが、複数の遺伝子領域を調べるべきであるとか、ネガティブコントロールを入れて実験すべきだなどの批判が行われていました。分子生物学では当たり前のことですが、この研究がDNA解析初体験だった自分は、こういった基本をよく理解していなかったのです。

そこで、追加の実験を開始したのですが、前回はいままでの実験が、今度はうまくいきません。DNA増幅の成功率が大幅に下がり、そして成功した場合でも、配列を解読すると、ほとんどがヒトと判定されました。ほんとうにヒトの血を吸血していたのかもしれませんが、実験の最中に混入した可能性を、否定できません。分子生物学初心者であるわたしの手技の拙さのために、試料が何らかの理由で使えなくなってしまったのかも



まとめ会議の最中に、ヒルの解剖を手分けして行いました。

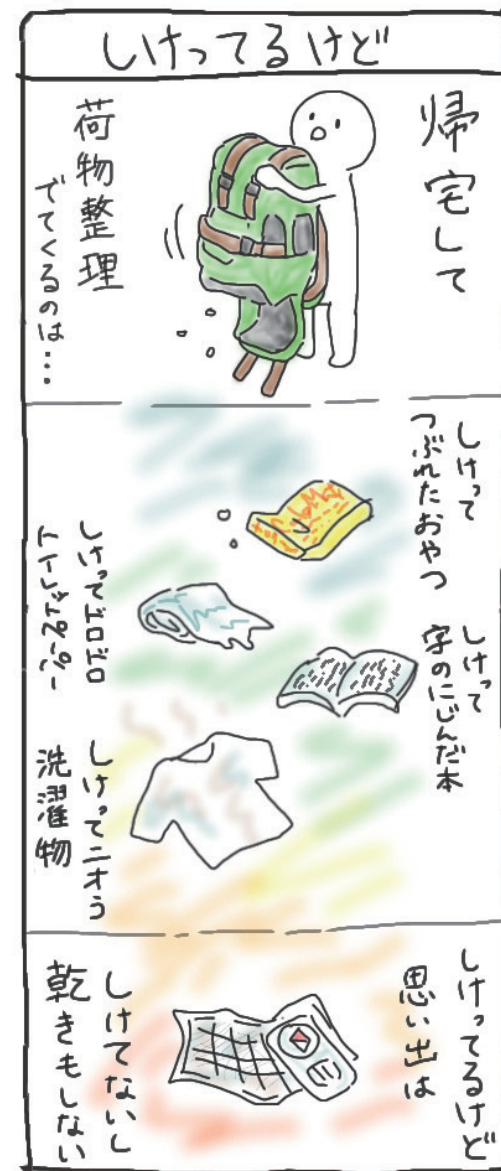
日本のほかの場所のヤマビルについて話を聞いてみると、屋久島は、ヒルはむしろ少ない方です。三重県の藤原岳では1時間で100匹捕まえられる場所もあるとのこと。子どもヤマビル研究会の研究結果から類推すると、屋久島が花崗岩の島であることが関係していそうだが…

しれません。結局、以前の原稿で使った試料は使うのを断念し、新たに、2016年以降の試料を解剖からやり直すことにしました。2017年の調査に参加したヒル研究者の森嶋佳織さんと一緒に、当時広島にいた中野さんに解剖を習いに行き、美しい標本を作るのを目指すのではなく、ぐちゃぐちゃでもいいから10分で消化管を取り出す方法を学びました。それを調査後のまとめ作業のときにほかの調査員に伝授して、マンパワーで解剖を行いました。新たに119匹の試料について、実験を一からやり直し、論文を再投稿しました。

そうして戻ってきた査読結果を読むと、「こんな少ないサンプル数で何か言えると思っているの!？」的なことが書かれていました。そこに紹介されている文献は、おそらく査読者たちのチームによる、ボルネオで2000匹以上のヒルを解析したという恐ろしい論文でした。2012年に出た、ヒルを用いてベトナムで絶滅危惧種の哺乳類の生存を確かめたという論文のサンプル数は40くらいでした。わたしが最初に屋久島のヒルについて原稿を書いた2018年初頭時点では、先行研究のサンプル数は200くらいまで増えていましたが、わたしが再実験で1年ほど足踏みしている間に、ものすごいインフレーションが起きていたようなのです。

結局、「本研究は、ヒルを使った哺乳類のモニタリングの効率を、従来の方法と比較することを目的としている。そのためには、従来法によって完璧に生息状況が分かっている、哺乳類多様性が低い場所で調べることが有効である（だからそこまでサンプル数はいらぬ）」と批判を跳ね返し、ぶじ、受理にこぎつけました。最後の小改訂の連絡は、2019年の調査の最中に届きました。この年、連日の日帰り調査でほとんど自由時間はありませんでしたが、何とか寝る前に30分ひねり出して修正し、受理にこぎつけました。無理がたたって翌日起きられず、調査をあきらめなくてはならなくなりましたが!

ヤクザルなよんま



この論文にはほかにも発見がありました。それは、ヒルがカエル(ヤクシマタゴガエル)も吸血する、ということです。日本全国でヒルの宿主を調べた森嶋さんの研究によると、シカがいない場所では、カエルが主要な宿主になっているとのこと。



バブル期のCMソング「24時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。



昼ごはんまで

やっとの思いで定点につき、ふう、とりあえず一息。すぐに無線で定点に着いたことを知らせます。この時点でだいたい6時か7時くらいでしょうか。

「こちら1e 定点ベンヤミン*。定点に着きました。これより調査を開始します。」

すぐに統括者、往々にして半谷さんから返信が来ます。「はい了解」←半谷さんの無線の返信はいつもこれです。定型文です。屋久島を離島する頃には耳に残ってしばらく離れません。

次にフィールドノートに調査開始時刻を書いて、体にヒルがついてないかのヒルチェックを行います。定点についた時と、その3時間後の2回調査を行うので、すぐに確認するのが重要です。幸い？今回ヒルはついていないようです。晴れが続いていたからでしょうか。

さて、すぐにやることはやったし、あとはサルの鳴き声が聞こえるまで自由時間です！絵を描いたり、瞑想したり、写真を撮ったりヒルを観察したり、何でもできますが、僕は小説を読むのが好きです。本を取り出そうとカバンをガサガサしていると――サルの声が聞こえます。え、遭遇が早くない！？まだ着いてから30分もたっていないよ！？急いで連絡です。

「こちら1e 定点ベンヤミン。北西方向からキャツ、キャーというサルの



の鳴き声が聞こえます、どうぞ」

どうやら統括者が向かってくるようなので一安心。鳴き声を記録しながら、本を読みます。キャー、ぺらっ、ウギャー、ぺらっ・・・読書しながら2分おきに声が聞こえてきます。音量から群れが近いんだなと思いつつ、しかしサルはなかなか姿を見せません。実際、僕が2年大川林道で定点調査をして、サルを見たのは1回きり(しかもヒトリオス)なので、定点調査員はほぼサルの目視とは無縁です。ぺらっ、ぺらっ、ウギャー、ぺらっ、ぺらっ、ぺらっ、キャー・・・その後も鳴き声は聞こえてくるものの、群れが遠ざかっていくのか、声はどんどん小さく、聞き取れる頻度も少なくなっていくます。どうやら開始早々がピークだったようです。

すっかり静かになり、読書は夢中で進みます。ふと、腰が痛くなり伸びをしがてら上を見ると、樹々に日が当たりとてもよい景色。座っている倒木を見れば、こちら水も吸ったコケがとても生き生きとしています。屋久島の、森の中1人でのんびりするというのは、もしかしてとても贅沢なことだな、と思いつつ、また本に目を戻します。定点の午前はこうして、お腹がすくまであっという間に時間が経つのです。

(亀田果夏、2021-2023年参加)



*ベンヤミンとは筆者のヤクザルネーム。ヤクザルネームは、あだ名のようなもので、拝命すると多くの場合一人称はこれになります。中には複数持っている人も！

犬山より

新聞報道等でご存知の方も多いかもかもしれませんが、今年の2月4日、われわれヤクザル調査隊の仲間が、屋久島で調査中に事故で亡くなりました。突然の訃報に、屋久島で苦楽を共にした同じ年に参加した調査員だけでなく、彼女のことを知らない新旧さまざまな世代の調査員が、やり場のない悲しみに包まれました。大きなショックを受けた調査員の心の傷を少しでも癒すため、当法人の支援を受けて、彼女のことを悼む集いを、犬山と東京と京都で行いました。今年のヤクザル調査では、奇しくも、台風のために、西部林道のまさに彼女が調査していた場所を調査しました。わたしも、調査中に二度現場を訪ね、彼女のことに思いを馳せました。

調査隊では、この事故をきっかけに、安全対策の見直しを行いました。ヘルメットの着用、救急セットの全員への配布、事前実習での安全についての説明、増水時の渡渉に備えた装備の準備などです。安全対策に関する動画の作成も行う予定です。わたしは、これまでもずっと、「安全が第一、データが第二」と、ヤクザル調査隊中に言ってきましたが、その言葉を、すべての調査員に、事故が起きそうになるその瞬間に、どうしたら思い出してもらえるか、これからもずっと、模索を続けます。

彼女がヤクザル調査隊に初参加した2018年、台風のあとに好和荘の近所でみつけた折れたパパイヤの木を持ってうれしそうにしている写真を、好和荘に飾りました。一緒に調査した仲間が年を重ねてたくましく成長し、さらに若い人が新しくヤクザル調査隊に入ってくる様子を、これからもずっと、彼女に見守ってもらいたいと思います。合掌。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第7号
2023年10月2日発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：石橋京佳、半谷吾郎